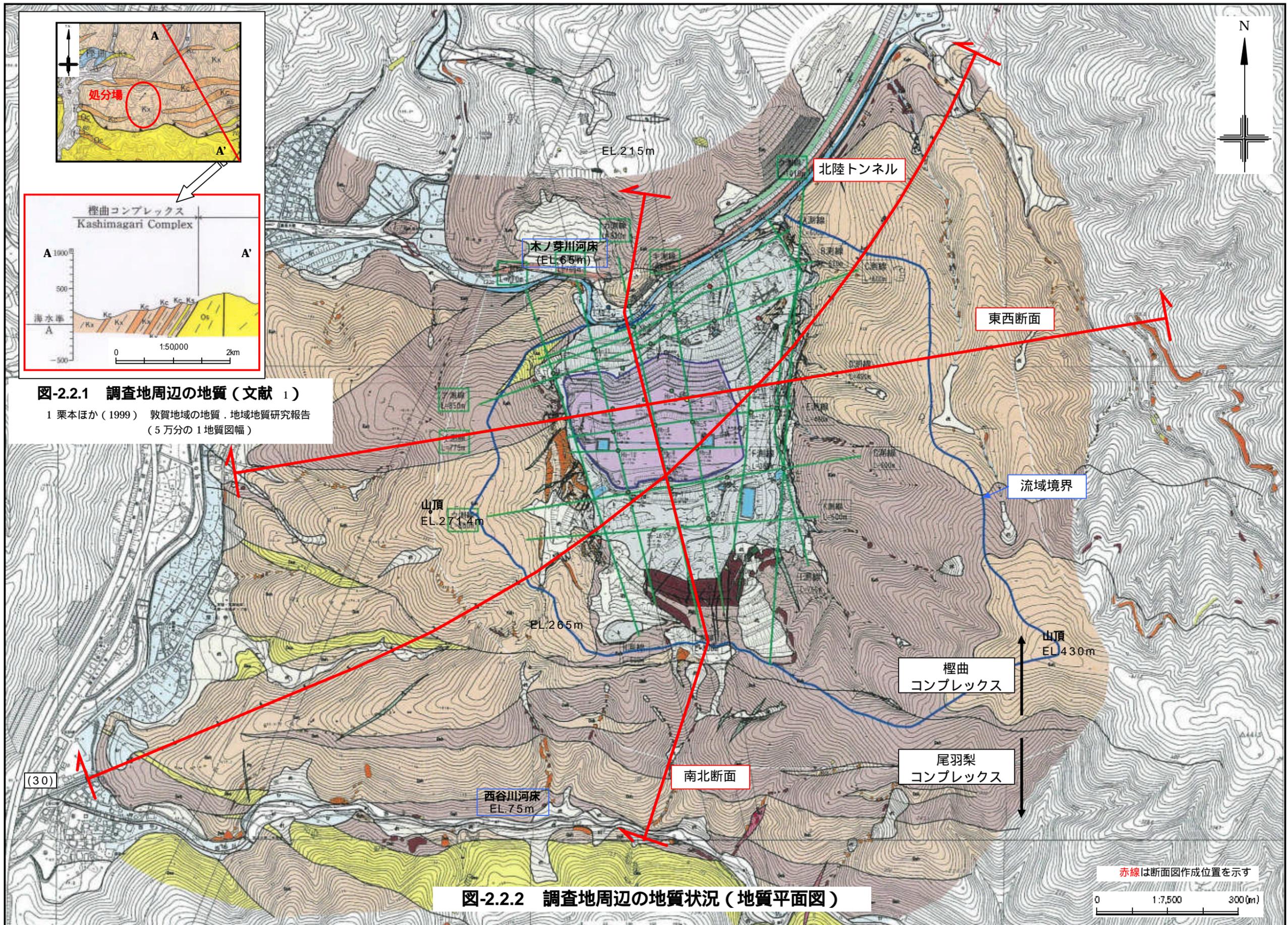


2. 調査・解析結果		
検討項目	要 点	備 考
2.2 処分場周辺の 地形・地質概要 2.2.1 地形状況 2.2.2 地質状況 2.2.3 地下水状況	<p>2.2 処分場周辺の地形・地質概要</p> <p>既往の文献調査で明らかとなっている処分場周辺の地質分布・地質構造を、表-2.2.1，図-2.2.1に示す。また、本調査の地表地質踏査結果から明らかとなった処分場周辺の地質構成ならびに地質分布（地質平面図）を、表-2.2.2，図-2.2.2に示す。</p> <p>なお、本調査結果から明らかとなった、処分場周辺における地形・地質の概要は、以下のように整理される。</p> <p>2.2.1 地形状況</p> <p>処分場は敦賀市の市街地の東方約4kmの山間部に位置する。処分場の北側は木ノ芽川に面して地形的に低くなっている（木の芽川の標高：約65m）が、処分場の東～南～西側は標高250～400mの山稜を有する山体に囲まれて地形的に高くなっている。</p> <p>処分場の北縁を流れる木ノ芽川は東方から西方へと流下し、処分場付近および下流部において多少の蛇行を繰り返しながら敦賀平野へと流れている。</p> <p>処分場南側山体の稜線よりも南側の流域には、西谷川が概ね東方から西方へと流れている（処分場近傍の河床標高：75m）。</p> <p>JR北陸トンネルは、処分場底面の約40m下を北東 - 南西方向に通過する。処分場下付近におけるトンネルの標高は45～50m前後であり、木の芽川の河床標高（約65m）よりも15～20m低い。</p> <p>2.2.2 地質状況</p> <p>処分場を含むこの地域一帯の地質分布状況を、図-2.2.1に示す。この一帯は、日本列島の地帯構造区分上「美濃 - 丹波帯」に位置づけられ、堆積岩コンプレックス（泥岩を基質として様々な種類の岩石が混じり合ったもの）と火成岩類（ひん岩等の岩脈）が分布している。この中で、処分場周辺の地質は、中生代ジュラ紀₂に形成された褶曲コンプレックスと呼ばれる混在岩に区分され、頁岩を主体とし砂岩、チャートなどがレンズ～塊状の岩盤として分布する。</p> <p>文献₁によると、処分場周辺に分布する堆積岩類の成因は、海洋プレートの沈み込みの過程で形成された「付加帯」（図-2.2.3参照）であると解釈されている。</p> <p>処分場の周囲の地質状況は、頁岩が主体として分布し、その東側および西側にはチャートが分布する（図-2.2.2参照）。</p> <p>処分場の下には盛土(b)（=土砂層）が分布し、その下には頁岩を主体とする岩盤が分布している（図-2.2.4参照）。ただし、この頁岩中には、小規模な砂岩、チャートの岩体がレンズ状ないしは薄層をなして分布している。</p> <p>2.2.3 地下水状況</p> <p>周辺の地下水位は、地表地質踏査で把握した周辺の沢における湧水状況などから、処分場上面（標高 160m付近）に対し、稜線部（標高250m）付近まで高まっていると考えられる（図-2.2.4 参照）。</p>	<p>表-2.2.1 調査地周辺の 広域地質構成</p> <p>図-2.2.1 調査地周辺の地質状況</p> <p>表-2.2.2 処分場周辺の地質構成</p> <p>図-2.2.2 処分場周辺の広域地質 断面図</p> <p>図-2.2.3 付加帯形成モデル</p> <p>1：出典 栗本ほか（1999） 敦賀地域の地質・地域地質研究報告 以下、【5万分の1地質図幅 「敦賀」（国土地理院，1999） と表示する。</p> <p>ジュラ紀 146～208Ma（Ma：百万年） 新版地学事典（地学団体研究会， 1996による）</p>



(注：地質凡例は次ページに掲載)